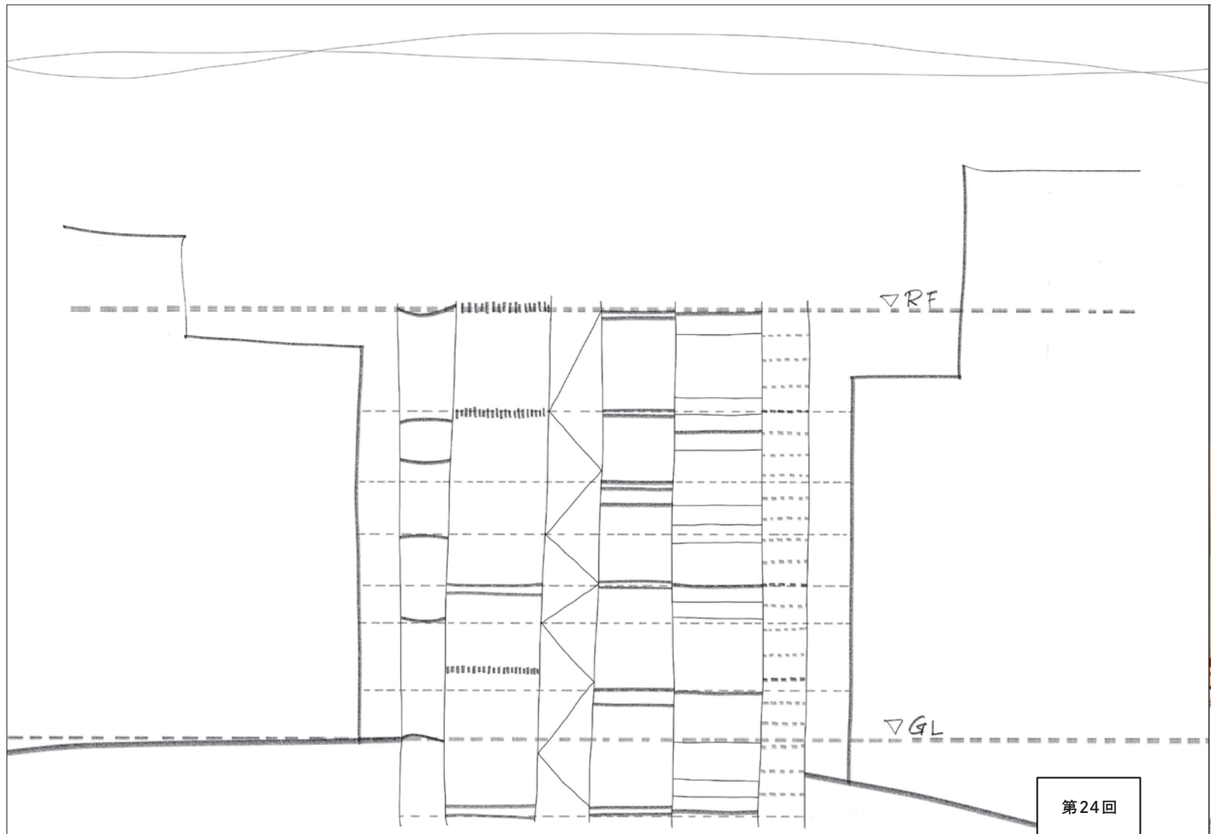



第24回

# 私の家

スケッチ・文 | 建築家 吉田州一郎・吉田あい

## 「YY house・office・kitchen」

連載「私の家」は、建築家が1枚のスケッチを通して自邸を語る頁である。どのような思想に基づいてつくられた空間なのか、あるいは日々どのように過ごす場所なのか、写真ではないぶん、想像力を働かせ、読み込んでいただきたい。

第24回はアキチアーキテクツを主宰する建築家の吉田州一郎さんあいさんの自邸である。

東京都心部、山手線内の、周囲には大規模な集合住宅が建ち並ぶなかにひっそりと建つ。吉田さんたちは、自邸を専門誌に発表した際、子どもが成長する環境とはどうあるべきかを考え、内部にシェアオフィスとシェアキッチンを取り入れたと記している。住宅に社会性を纏わせたわけである。竣工して8年、2年前には屋上庭園も完成した。ここでの暮らしの今を綴ってもらった。

敷地は旗竿状の狭小地で、竿の部分は法規上の最低幅2m、奥まった旗地に建築面積28・7㎡、高さ10mの家が建つ。先端に飛び出た1、400㎜幅の塔状のファサードが、唯一の外観である。

土地を取得後、更地の土に触れながら日がな一日スタディするために通っているうちに、小さいながらもいくつかの居場所を発見していった。最終的には敷地を6つにゾーニングして、各々の場所が持つ空気感をそのまま立ち上げたような平面とした。それらを、断面的な密度の緩急をつけながら積み上げていく。硬さの違うミルフィーユ状の空間を束ねたような建築で、わずかな移動で、何層もの空間体験と出会う。天から落ちてくる光がじわじわと地階まで浸透していく様子は美しく、そのなかを路地のような階段で日々上下する生活は、とても伸びやかで心地よい。

地下と1階をシェアスペース（オフィスとキッチン）としたので、他人も行き来する、小さな都市の様相のなかで暮らしている。住宅を開くことで、街と地続きの感覚が増幅されて気持ちが豊かになる。他者を招くことで占有空間は小さくなるけれど、息苦しさはない。むしろさまざまなメンバーが持ち寄る外の空気が、常に都市の入れ子のなかにいることを認識させるので、家はただ、地球の一角の居場所に過ぎないと思える。

2021年、竣工して6年放置していた屋上に、緑のリビングを設えた。上空にひろがる鳥や虫たちのネットワークと接続できて、わが家はようやく地面から空につながった。とても小さい家だが、大地から宇宙につながる壮大な塔を建てたと思うと楽しい。

吉田州一郎（よしだ・くにいちろう）
1974年長崎県生まれ。2005年早稲田大学大学院修士課程修了、設計事務所、鉄鋼メーカー勤務を経て、2015年アキチアーキテクツを設立、現在に至る。
吉田あい（よしだ・あい）
1980年広島県生まれ、大阪府育ち。2007年早稲田大学大学院修士課程修了、Klein Dytham architecture、SPEACEを経て、2015年アキチアーキテクツを設立、現在に至る。

安全とデザインの未来をひらくSE構法

Information for Constructors
# NetworkSE

巻頭インタビュー
## 個の資産がまちを面白くする
深野弘之（「ニシイケバレイ」オーナー）

SE構法の実例
## デイサービスセンター しおかぜ お台場
設計：株式会社山陽設計
施工：株式会社中本屋工務店
SE施工：株式会社坪井（住友林業工事店）

## 三原久井の家
設計：株式会社バウムスタイルアーキテクト一級建築士事務所
施工：株式会社バウムスタイルアーキテクト

木造の21世紀を考える
## 室伏次郎 建築家

私の家
## 吉田州一郎・吉田あい 建築家

VOL. 190
Nov. 2023

## 10年後の予測は2年先より確実で簡単？

ここ数年、私たちの業界を取り巻く環境変化はこれまでになく激しいと感じる方は多いのではないでしょうか？　ロシアのウクライナ侵攻のあとはイスラエルとハマスの戦争が起こってしまいました。為替は1$=150円前後を推移し（2023年11月5日現在）、建築資材の高騰にどのくらい影響するのかと恐ろしくなります。1年、2年先を予想して事業を計画することが難しい時代になったことを痛感します。

先日、投資家で、レオス・キャピタルワークス株式会社の藤野英人社長のお話をYouTubeで見ていたときのことですが、彼は、「投資先を選ぶのに1年先を読むからわからないのだ。10年先を予想してみるとよろしい」と述べていました。私たちはつい「1年先がわからないのに10年先は絶対わからないに決まっている」と言いたくなりますが、あながちそうでもないと思います。

たとえば、自動車の自動運転技術の進化についてみてみましょう。この10年で急速な進化を遂げてきた技術が、1年後にさらにどのくらい進化しているのかの予測はしにくいですが、一方で10年後について考えると、ボタンひとつで目的地まで自動で運転する自動車は普通になっているだろうと予想できます。

携帯電話の通信速度や容量（5G）は1年後はどうなる?と聞かれてもわかりませんが、10年先は必ず6Gが出てきて今よりもっと大容量の通信に代わっているだろうと予測することができます。

同じことが、株の投資だけでなく会社の経営にも言えるような気がします。1年後の社会を考えて機敏に経営することも大事なことだとは思いますが、10年先を想像して、待ち構えることも必要だと今さらながら思います。

思い出すのは、2015年のパリ協定です。*

そこで日本は「2030年までに温室効果ガスの排出量を2013年度比で26%削減する」と世界に宣言しました。

その当時は、政府がまた無責任な約束をしたもんだと高を括っておりました。翌年も私たちの業界に大きな変化はなかったように感じます。しかし、パリ協定から10年後の2025年には、私たちの業界にも「法律の改正」というかたちで大きな波がやってきます。「住宅を新築する場合、BEI値が1以上の建物を建てることを禁止する」ことになったからです。

日本は続いて2050年までに脱炭素社会を実現すると宣言しました。つまりカーボン排出量ゼロの社会です。それまでに10兆円の税金を投入するとまで宣言しています。

27年後の社会は・・・。

先日「耐震住宅100%実行委員会」のシンポジウムでご講演いただいた地震学者の長尾年恭先生は、プレートテクトニクスの観点から「日本に大地震は必ず起こる」とおっしゃっていました。しかし、1〜2年の予測ではないが10年後と言われれば非常に高い確率になるとのこと。「大地震が日本で起こりますか?という質問は、人は死にますか?という質問と同じだ」ともおっしゃっていました。不確実な1年後と10年後の比較、いかがでしょう。

10年後の社会を見据えた事業計画を考えるということも面白いのではないでしょうか?

私の10年後の予想は、

① 建築図面を紙でやり取りすることは無くなる。誰でもデジタルデータで契約する時代に。

② 新築の低層ビルは、ほとんど木造が主流になっている。

③ 若い労働者は極端に減る。80歳くらいまで現場で作業する方が増えているか、現場で働く方々の賃金がもっと高くなるか、あるいはその両方。

④ 中古のマンション（築50年以上）は大量に余り、丈夫な木造戸建て住宅の資産価値が高いことに気が付く。

相変わらず都合のよい未来予想ですが、なんとなく10年先だと同意できる方もいるのではないでしょうか。

私はあと2年で還暦です。予測の難しい1年後、2年後の事業計画も頑張って立てますが、10年先の未来予測においても必要とされるエヌ・シー・エヌでありたいと願って10年後の事業計画を考えます。

みなさまの末永いご支援、お付き合いをよろしくお願い申し上げます。

＊パリ協定：第21回気候変動枠組条約締約国会議で採択された協定。加盟する196の国や地域がそれぞれ温室効果ガスの排出量の削減目標を示し、対策をとる義務を負うとした。

株式会社エヌ・シー・エヌ　代表取締役社長
田鎖郁男

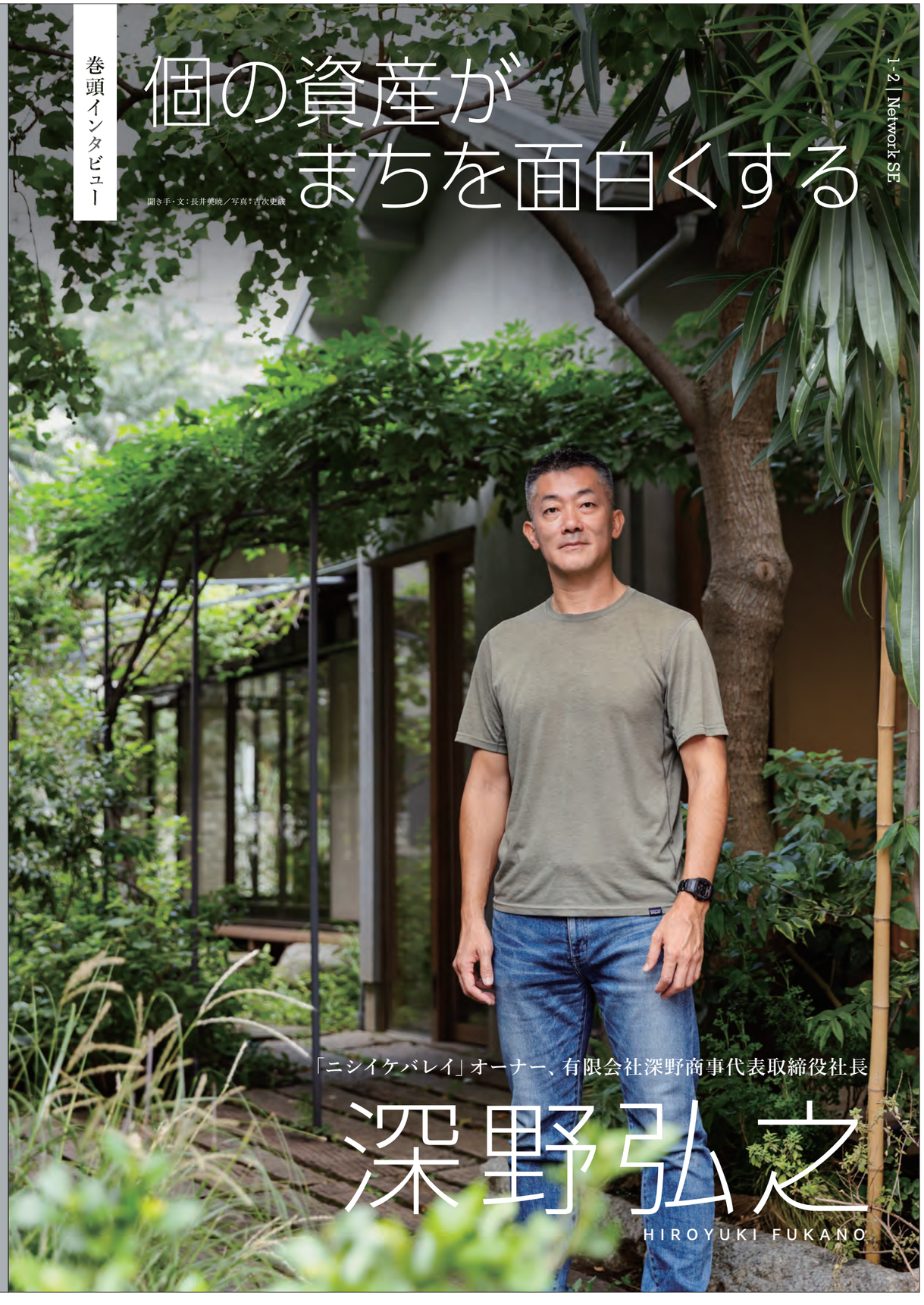
耐震構法
SE構法



巻頭インタビュー

# 個の資産が まちを面白くする

聞き手・文：長井美暁／写真：吉次史成



「ニシイケバレイ」オーナー、有限会社深野商事代表取締役社長

## 深野弘之

HIROYUKI FUKANO

東京都豊島区西池袋。池袋駅西口から要町方面に歩いて10分ほどのところにある
「ニシイケバレイ」は、飲食店やシェアスペース、住居がある複合的な空間だ。
オーナーの深野弘之さんは理解ある協力者たちとチームを組み、
先祖から受け継いだ土地や建物を活かし、特徴あるまちづくりを進めている。

## 大家にしかできないことがあると気づいて

**――「ニシイケバレイ」は約2,887㎡の敷地に、築年も構造も規模も異なる4棟の建物があります。いちばん古い木造平屋の家屋は古民家カフェ「チャノマ」として人気で、平日の今日もお客さんが次々に来店していますね。庭には緑がこんもりと茂り、木戸門まであって、池袋とは思えません。**

**深野**　この木造平屋は戦後すぐに、今で言う農林水産省に勤めていた祖父が退職金をすべてつぎ込んで建てたものです。資材の乏しい時期だったにもかかわらず良質な木材を使い、襖や欄間などの意匠も凝っているので、14階建ての集合住宅「MFビル」（1997年築）を大通り沿いに建てるとき、解体するのは忍びないと父が残すことを決断し、曳家をしました。その費用は3,000万円近くかかったと聞いています。当時20代半ばだった僕はワーキングホリデーでオーストラリアに滞在していて、残念ながらその現場を見ていないんですけど。

土地は深野家が元禄年間から所有してきました。建物はチャノマとMFビルのほか、チャノマの奥に鉄筋コンクリート造4階建ての集合住宅（コーポ紫雲、1987年築）、さらに奥に木造2階建てのアパートだった建物（1970年築）があります。

2019年に父が他界して僕が深野家を継ぎ17代目当主になった後、木造アパートの1階は飲食店、2階はシェアキッチンとコワーキングスペースに、また、コーポ紫雲の1階の1室も店舗兼住宅に改修しました。これらは木造平屋の改修を皮切りに2020年から段階的に進めました。

僕は植物が好きで、この場所を緑あふれるようにしたいと思い、園芸家と二人三脚で植栽も変えました。祖父母が木造平屋に住んでいたころの庭は松や梅、つつじの木がある純和風だったんです。

**――長男ということで、深野家の不動産をいずれ受け継いで大家業を手がけることになるという将来像は早くからお持ちだったのでしょうか？**

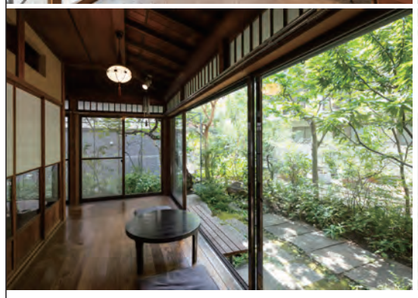
**深野**　いえ、家を継ぐことはあまり意識していませんでした。大家業の実態ってわかりにくいでしょう。大学卒業後に最初に勤めたのは有機農産物の流通団体「大地を守る会」です。学生時代に有機栽培の野菜の美味しさを知り、有機農業に興味を持ちました。その後、ワーホリでオーストラリアに行き、帰国後はまた有機農産物の加工品の仕事をしたり、有機JAS認証の検査員をしたり、大家業とはまったく関係のない仕事をしていました。

祖父母が亡くなった後は木造平屋が空いていたので、2000年から2016年まで僕と妻が住み、一時期は木造平屋の一角で自然食品店を営んでいたこともあります。一方で農家になろうか、なんなら地方に住みたいね、と妻と話し、実際に長野で土地探しもしていました。ところが、あるとき長野から帰ってきたらガラスが割られ泥棒に入られていた。それで目が覚めましたね。長野に行っている場合じゃないって（笑）。

それはちょうど大家業に興味を持ち始めたころでもありました。「としま会議」に参加して、大家業で注目を集めていた青木純さんと出会ったことを機に、先見的な大家さんの活動をいろいろと知り、大家という職分にしかできないことがあると意識するようになったんです。としま会議は豊島区で面白い活動をしている人の話を聞くサロン型イベントで、2014年に始まり今も続いていて、誰でも参加できます。

としま会議を通じてネットワークが広がり、そのなかで不動産運営コンサルタントの木本孝広さんが兵庫県宝塚市で大家として進めた「イノタウン」という、エリアの価値を高めるまちづくりも知りました。

木造平屋を改修したカフェ「チャノマ」は、うっそうとした庭木に隠れるように佇む。木戸門は明治末期の創建で、震災や戦火を免れた。藤棚の下を通って店に入るという動線は深野さんの希望から。



「チャノマ」の内外。土間は地面と同じレベルに下げた。敷地内通路と庭の境界は、枕木を通路にはみ出すように新設したり、たくさんの緑を植えたりして曖昧に。通路はアスファルトを一部剥がして植栽帯を設け、"歩きたくなる"ようにした。このように変えてから、ゴミの放棄や立ち小便がなくなったという。庭には桜桃や栗、柿、コナラなど実のなる落葉広葉樹を多く植えている。「どんぐりが落ちているような道にしたかった」と深野さん。

## 顔が見えるように1階をまちに開く

**――イノタウンのことを木本さんは「直径100mのまちづくり」と呼んでいます。その中心にある新築3階建ての賃貸住宅にはSE構法が採用されています。1階のカフェがまちのハブのようになっていますよね。**

**深野**　イノタウンには新築を含めて4棟の賃貸物件があると聞き、ここと規模が似ていると思って現地を見に行きました。木本さんのお父さんと3〜4時間話してとても参考になったので、東京に戻ってから木本さんともいろいろ話し、僕が大家として"顔の見える関係"のまちづくりを進めるにあたり、コンサルタントとして伴走してもらうことをお願いしました。

父が末期癌で相続発生が見えてきたころ、まず着手したのが、この場所を永続的に残していけるようにすることです。事業承継の専門家と税理士を交えたチームを本木さんに組んでもらい、それまでは父や母など個人所有だった土地や建物を、僕が代表を務める有限会社深野商事の所有に集約しました。

これと並行して、本木さんとインテリアデザイナーの日神山晃一さんと僕の3人で、この場所をどう開いて豊かなものにしていくかを話し合いました。日神山さんは豊島区長崎の商店街で「シーナと一平」というまち宿を運営していて、本木さんはその運営会社「シーナタウン」の役員でもあるという関係です。

うちはMFビル、平屋、駐車場、アパートがバラバラに存在しながらも道路や敷地内通路でつながっているので、ひとつのエリアとみなして手を入れていくほうがインパクトも可能性もあるだろう、それなら名前を付けようか、ということで「ニシイケバレイ」に決めました。ビルが林立するなかでこの木造平屋だけは低く、まちの谷のような場所だと思ったからです。その様子と僕の好きな「風の谷のナウシカ」が重なっての命名でした。

エリアが広いので、全体を俯瞰して見られる人がいたほうがいいという日神山さんの紹介で、豊島区雑司が谷に事務所を構える建築家の須藤剛さんにも加わってもらいました。木本さんの事務所も豊島区要町なので、みんな豊島区に縁があります。

**――都内有数のターミナル駅である池袋駅至近の立地ですから、デベロッパーなどから再開発の話、平たくいえばもっと儲けられる話が多々あったのではないでしょうか？**

**深野**　木造平屋に住んでいたときは玄関の呼び鈴がひっきりなしに鳴っていましたね。でも収益性の高い建物に建て替えるなんて、そもそも考えたこともありませんでした。木造平屋は父がわざわざ曳家をして残したというだけではなく、僕も10数年住んでいたからそれなりに愛着がある。また、いい風景をつくりたいという気持ちも薄らとあったと思います。

父の転勤で僕は幼少期を青森や岩手で過ごし、小学校に入るときに池袋の隣の要町に引っ越し、中学2年から木造平屋に3世代で住むようになりました。小学生のときも、近いのでここによく来て、庭でカエルや昆虫を捕まえて遊んだものです。1986年までは平屋と木造アパートだけだったから、庭がもっと広かった。そのような子どものころからのこの場所の記憶が原体験や原風景として、「ニシイケバレイ」というまちづくりを進める原動力になっているところはあるように思います。

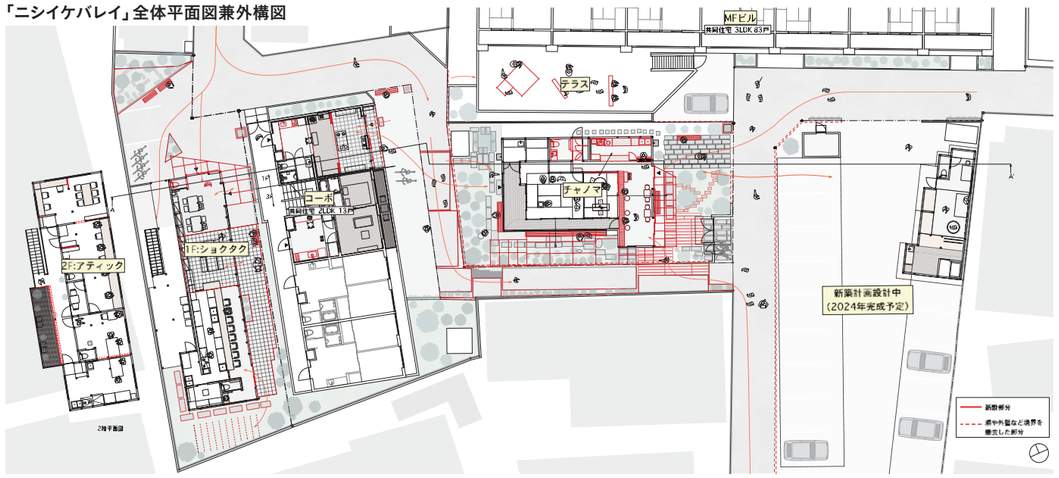
というのも今、その原風景をなぞるようなことをしているんです。木造アパートの裏に小さな池をつくってメダカを泳がせたり、知り合いからカエルの卵をもらってきて孵化させたり、チョウの飛来を増やすために柑橘類を植えたり、蜜源植物を増やしたり。それと僕がここで顔の見える関係をつくりたかったのは、多分に「大地を

手づくりの瓦版ややはり手づくりの鳥の巣箱など、深野さんのニシイケバレイへの愛情がそこここから伝わる。深野さんは庭木の水やりや草取りをするために1階にいることが多く、1階にいると住人ともよく会う。「小さな子が『大家さーん！』と声をかけてくれるのが嬉しい」と語る。

「チャノマ」と「コーポ紫雲」の間の通路。通路はスリット状にアスファルトを削って土を入れ、緑が顔を覗かせるようにしている。チャノマの庭のコーナー部は、煉瓦を半分に切って積み上げ土留めとし、その余った煉瓦も通路に活用して一体感を持たせた。コーポ紫雲の1階角部屋は須藤さんの設計で店舗兼住宅に改修。現在は、作家ものの器を扱うショップが入る。開口部の木製建具が効いている。

「コーポ紫雲」は壁に蔦を這わせて緑化し、木造アパートとの間には緑のパーゴラを設け、チャノマから木造アパートまで植物が有機的につながるようにした。木造アパートの1階は「ショクタク」、2階は「アティック(屋根裏の意味)」と名づけられている。街区表示板を模したサインはニシイケバレイ内で共通。アパート2階の共用廊下は既存の手すりを切って床を広げ、共用ベランダとしてシェアキッチンの客やコワーキングスペースの会員が使えるようにした。

**「ニシイケバレイ」全体平面図兼外構図**




図面提供:須藤剛建築設計事務所

## バラバラな既存の住宅群をささやかな行為で結ぶ ――建築家・須藤剛さん

「ニシイケバレイ」に建っている建物は、築年数も規模も構造もバラバラです。これらを結び、ひとまとまりのエリアに見立てられるように、新しく取り入れる要素はスケールや材料を揃えながら、既存の境界を横断して配置しています。たとえば、チャノマもコーポ紫雲の店舗兼住宅もアティックも出入口は木製建具で、床は内外のレベル差がない土間。また、各所に点在するパーゴラはすべて25㎜角のスチールパイプでつくりました。さらに、改修時に撤去した柱で外部の植木鉢をつくったり、既存の敷石を花壇の縁に使ったりといった循環・転用・移動による“再配置”も試みています。もともと使われていた部材の役割を変えて残すことで愛着や時間が改めて積層していくという、これまでひとつの建物の中で実践して有効だと思っていた手法を、複数の敷地をまたいで応用した格好です。在るものを活かしながら最小限の手付きで全体をつなげることを考えました。

塀を取り去れば空間は物理的につながるけれど、それがゴールではありません。庭との境界をぼかすため、敷地内通路の舗装にも手を入れました。アスファルトはパブリックな記号性を持ちますが、そこに手を入れることでプライベート性を帯びます。自分たちの手で扱えるもののように見えると言いましょうか。

そして手入れの行き届いた庭も、人の手を感じさせるものです。塀を撤去したから通路から庭が丸見えになったわけですが、きちんと保たれた庭から、深野さんのこの場所への想いや愛情が通路を歩く人にも自ずと伝わるでしょう。深野さんが気持ちいいと思っているものをほかの人も享受できる環境、それをつくれる安心感が設計当初からありました。

6歳になる僕の子どもがカエルを初めて見たのはニシイケバレイでした。池袋のような都会にそんな場所があることは貴重で、みんなが実現できることではないだけに非常に価値のあることだと思います。その価値に共感する人の輪が、ニシイケバレイで広がっていくことを願っています。

新築する建物では、これまでに積み上げてきたニシイケバレイらしさを、いかにさりげなく盛り込むかを考えて設計しています。

守る会」の影響が大きいと思います。大地を守る会は農業生産者と消費者の間に顔の見える関係をつくりたいという想いから出発していて、この大根はどこの誰がつくったと生産者の顔がわかるように活動しています。今は普通のスーパーで売っている野菜でも生産者の名前や顔がわかることが増えましたが、大地を守る会は先駆けでした。その“大地イズム”が僕の中に流れていて、今はその対象が野菜ではなく、まちなんです。

この敷地内には1LDKから3LDKまで約100戸の賃貸住宅があります。でも同じ建物や敷地に住んでいるだけで住人同士の交流が活発になることはない。田中元子さんの著書を読んだり、田中さんが営む「喫茶ランドリー」も見に行ったりして、うちも1階をまちに開けば顔の見える関係が増え、暮らしが豊かになったり助け合ったりすることにつながるのではないかと思いました。

そこで1階を開くために、木造平屋を囲っていた塀を取り払い、路地との境目をぼかすようにしました。この路地は、法規上は敷地内通路なので手を入れることができ、アスファルトを削(はつ)ってスリットをつくるなど、須藤さんが絶妙なさじ加減で考えてくれました。コーポ紫雲の1階の角部屋もベランダの手すり壁を撤去して、路地から直接出入りできるようにしました。

## 大家はやりたいことをやって熱量を維持することが大事

**――この路地は歩きたくなる、ちょっと寄ってみようと思わせます。先ほど言っておられた「いい風景」のひとつですね。**

**深野**　ここに関わっているメンバーはみんなが豊島区に縁があるほか、年齢が40代から50代、子どもは僕の娘が小学1年生でいちばん年上というようにまだ小さく、次の世代にいい環境を残していきたいという想いを共通して持っているのかなと思います。僕にとって娘が生まれたことはとても大きくて、社会はこれからいろいろと大変な時代になっていくだろうけど、少しでもいい経験やいい仲間を残してあげたいと思う。それが顔の見える関係をつくりたいということの背景にあります。

最近はニシイケバレイの認知度が上がってきたので、仲介会社を通さずとも、SNSで空室情報を流せば問い合わせがくるようになりました。ニシイケバレイを知って共感してくれている人が住みたいと言ってくれるので、すでに関係性の下地ができている。だから会った瞬間にいい雰囲気が生まれます。

以前からの住人と僕、あるいは住人同士の交流も増えてはいますが、まだまだこれからだと思っています。今年の夏からは『ニシイケバレイ通信』という瓦版をつくって賃貸各戸へのポスティングを始めました。SNSもあるけれど、わら半紙にリソグラフで印刷した手触り感のあるもののほうが顔が見えるだろうと思い、僕が好きでつくっています。住人にも寄稿してもらってね。どれだけ読んでくれているかはわかりませんが、なにか伝わるものはあるでしょう。また、MFビルの集会室を住人が本を貸し借りできる図書室にしようと現在改造中です。その第一歩として漫画『ゴールデンカムイ』を全巻買い揃えました。僕が読みたかったからですけど(笑)。いずれ子どもの衣類や食料などもシェアできるようにしたいと思っています。

大家がまちづくりへの熱量を保ち続けるには、自分のやりたいことだけをやることがなにより大事です(笑)。場は生き物なので、僕のテンションが下がると、ここで行われるアクティビティのテンションも下がる。そうならないように、僕は自分が面白いと思うことをやって常にルンルン楽しくしているとともに、仲間がやりたいと言ったことの可能性を狭めないように、好奇心のアンテナを広く持つように心がけています。

チャノマの向かいの駐車場だった土地には、3階建ての集合住宅が来年建つ予定です。これも須藤さんに設計を頼みました。1階は貸し店舗の計画で、ニシイケバレイの1階の回遊性がさらに高まることを期待しています。

深野弘之(ふかの・ひろゆき)
1970年生まれ。深野家17代目当主。先祖から受け継いだ豊島区西池袋の一角を「ニシイケバレイ」と名づけ、2020年から大家業を営む。まちのなかでの顔の見える関係づくりに努めている。
https://nishiikevalley.jp

SE構法の実例

# デイサービスセンター しおかぜ お台場

設計：株式会社山陽設計
施工：株式会社中本屋工務店
SE施工：株式会社坪井（住友林業工事店）
写真：P.7-8 QUA DESIGN style／田中園子、P.9-11 新澤一平
文：橋本純

北側から俯瞰する。敷地は瀬戸内海を一望する高台で、既存の斜路を利用してアプローチする。手前の切妻屋根が車寄せ、その奥に、敷地形状に合わせて、異なった形状の屋根を戴くふたつの棟を連結して配置している。左手が下津井の漁港、その奥に瀬戸大橋を望む。

左頁：デイサービス食堂エリアから、フィットネスエリアを見通す。瀬戸内海への眺望をすべてのエリアで確保している。開口部から右手の柱までの登梁のスパンは5,460mm、右手に並ぶ3本の柱は180mm角で、30mmの面取りをしている。

上：エントランスホールからデイサービス食堂エリアと休憩コーナーを見る。彼方に瀬戸大橋を望む。

下左：瀬戸内海を望むフィットネスエリア。

下右：2階多目的室を見る。地域住民の利用を想定している。

# 記憶の継承、そしてその先へ

**地域の人たちの記憶に残る建物があった場所に、**
**そのイメージを継承しつつ、まちの将来を支える施設が建設された。**

「社会福祉法人しおかぜ」（以下「しおかぜ」）が、倉敷市下津井に計画した「デイサービスセンター しおかぜ お台場」（以下「お台場」）が竣工、開園した。同法人しおかぜ お台場管理者 兼 生活相談員の原浩文さん、設計を担当した株式会社山陽設計代表取締役社長の髙橋一有さん、同社建築設計部 設計二課 課長の小村尚毅さんにお話をうかがった。

## 瀬戸内の要衝、下津井とその現在

下津井は、倉敷市の最南端、瀬戸内海へ突き出した景勝地として知られる鷲羽山を近傍する古くからの要衝で、かつては金比羅参りの玄関口、そして漁港としても栄えたところである。しかし近代以降は、宇高連絡船、瀬戸大橋へと交通の本流が遷移し、漁業の中心も瀬戸内海広域から沿岸漁業へと変化した。現在は近海のタコ漁で知られる。高度成長期には、北西に近接する水島地区にコンビナートが建設され、若年層労働力の流失と相まって漁業従事者の高齢化が進み、緩やかに縮退していく状況が続いた。そうした地域の状況が「しおかぜ」誕生のきっかけとなった。

## 地域の福祉を支える

「しおかぜ」の創立は1975年である。漁師を引退した高齢者や、坂の多い下津井地区において、ケアの行き届かない独居老人のための介護施設の必要性を感じた地域の有志が資金を拠出し、自ら理事となって「しおかぜ」を設立した。地域密着型でかつ民主的な成り立ちの社会福祉法人である。特別養護老人ホームの建設・運営から始まり、現在は、介護事業に加え、保育事業もスタートさせ、合わせて9施設を、約250名の職員で運営している。

この「お台場」は、同法人が2023年4月に運用を開始した新しい施設だが、その内容は一般的なデイサービスとはいささか異なっている。食堂エリアに隣接して、フィットネスエリアが連なっている。一方で、浴室は機械式入浴設備を備えた介護浴槽ではなく、一般家庭の浴槽に介助用の手摺を付加した程度の設えである。利用者はひとりでも入浴ができるが、自宅でのひとり入浴時の不安やトラブル回避のため、こちらで入浴後に帰宅する方が多いという。
聞けば、坂のまち下津井で老いても永く住み続けるためには、ある程度足腰を鍛えておく必要があり、ここはそれを目的としたデイサービスだという。つまりスポーツジムのようなデイサービスセンターなのである。ただ、そうした内容の施設に至ったのは、多くの地域住民や利用者へのヒアリングを経ての決断であった。「しおかぜ」は現在、下津井に3箇所のデイサービス施設を持っており、それらは少しずつ異なった役割を持つが、共通しているのは、このまちに住み続けるためのサポートを提供するという点である。まさに、地域密着型の社会福祉法人である。

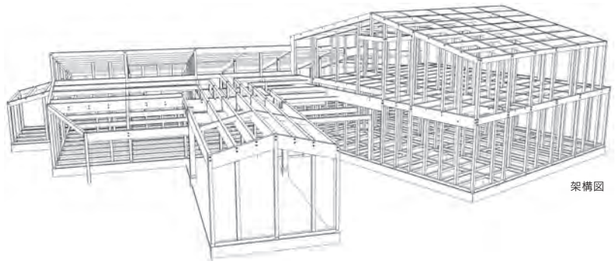
## 瓦屋根を戴く地域のシンボルとして

敷地は、下津井の街並み保存地区の西に位置する高台で、下津井祇園神社に隣接する。幕末にはお台場が築かれ、明治中期には、「金波楼」という名の料亭が建てられた。その料亭は、近年焼失するまで地域のシンボル的な存在だった。そういった経緯もあり、地元の方々は今でもこの場所に「金波楼」の印象を持っているという。
そこで、外観はかつての料亭のイメージを継承すべく、木造で瓦を載せた勾配屋根の重なるデザインとした。かつての石垣が残る斜路を上ってアプローチすると、切妻屋根を戴いた、間口4,550mm奥行

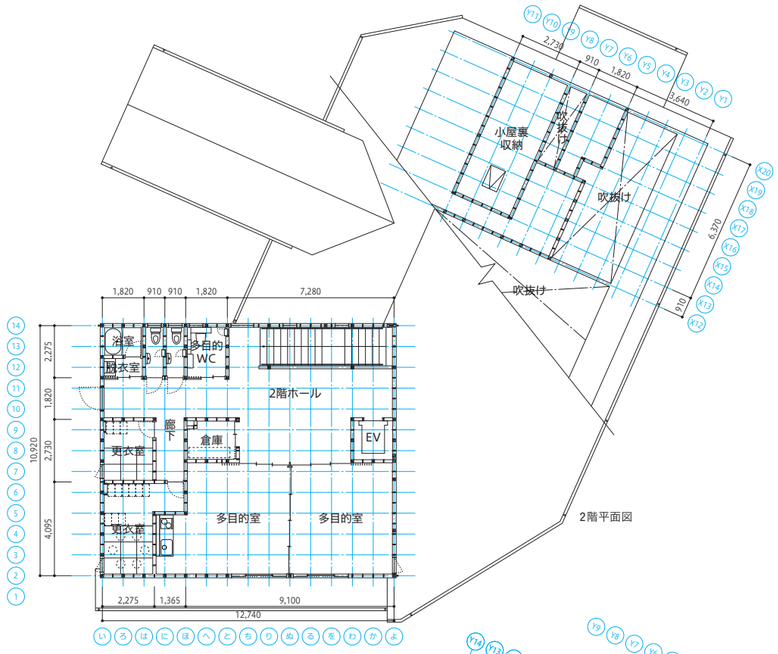
左頁上：車寄せを見る。成500mmの梁を8,190mm飛ばしている。

左頁左下：エントランスより車寄せを見る。

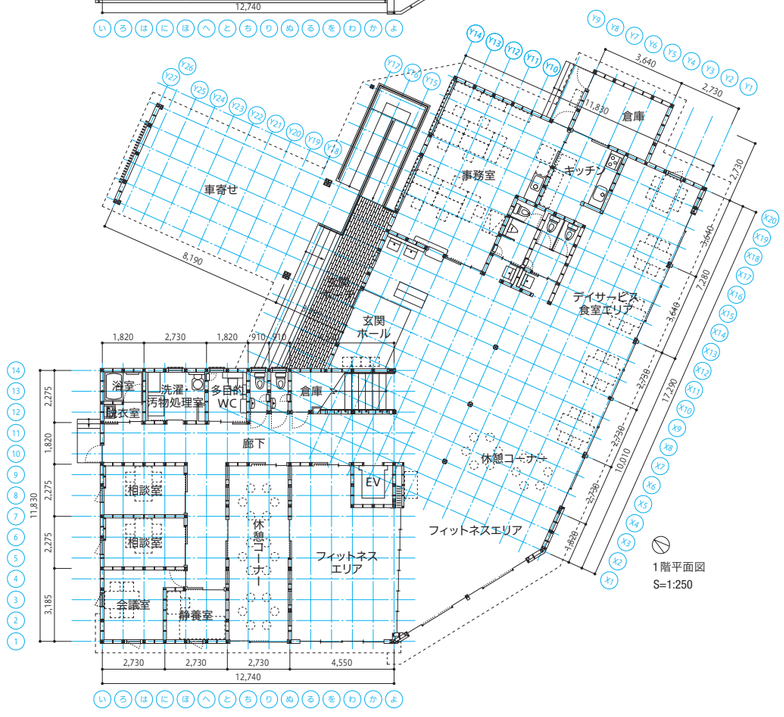
左頁右下：南側から見る全景。



架構図




2階平面図




1階平面図
S=1:250

**建物名称：デイサービスセンター しおかぜ お台場**
所在地：岡山県倉敷市下津井1丁目387番1
主要用途：デイサービスセンター
建主：社会福祉法人しおかぜ

**設計・監理**
建築：株式会社山陽設計
担当者名：小村尚毅／井上抄子 冨岡智子
構造：株式会社エヌ・シー・エヌ

**施工**
施工：株式会社中本屋工務店
SE施工：株式会社坪井（住友林業工事店）

**敷地条件**
用途地域：第1種住居地域
防火指定：指定なし　法22条地域
道路幅員：北側6.3m
駐車台数：10台

**構造・構法**
主体構造・構法：SE構法（木造軸組構法）
基礎：べた基礎
杭：鋼管杭

**規模**
階数：地上2階
軒高：7,893mm
最高高さ：8,167mm
主なスパン：910mm
敷地面積：2,048.79㎡
建築面積：454.58㎡（建蔽率：22.19%）
延床面積：511.07㎡（容積率：24.94%）
1階：371.95㎡
2階：139.12㎡

**工程**
設計期間：2020年3月～2022年6月
施工期間：2022年8月～2023年3月

**設備システム**

**空調**
空調方式：個別空調
熱源：電気

**衛生**
給水：公共上水道
給湯：ガス給湯器（プロパン）
排水：公共下水道

**電気**
受電方式：架空線方式

**防災**
消火：自動火災報知設備、誘導灯、非常用照明
排煙：自然排煙
その他：救助袋

8,190mmの大きな車寄せが現れる。送迎車輌が2台並べるスパンと、アプローチからの進入経路によってそのサイズと位置が決められた。成500mmの梁を長手方向に飛ばした架構は圧巻である。

エントランスを入ると正面には食堂エリアが広がり、その先には瀬戸内海と瀬戸大橋の眺望が開ける。右手のフィットネスエリアは敷地形状に合わせて角度をつけながら、ビスタを確保しつつ連続している。食堂エリアのテーブルはすべて窓側の眺望のよい場所に並べられているため、一般的な高齢者施設の食堂の印象ではなく、むしろカフェやレストランのようなゆったりとした空間の印象がある。定員を午前午後それぞれ20名とし、3時間制で介護保険を利用する立て付けとすることで、ゆとりのある環境を創出している。

職員数は理学療法士、看護士が1名ずつ、介護職員が2名の4名で運営する。フィットネスも、自分に合った無理のない運動ができるように指導できる体制となっている。2階は多目的室として地域住民の会合などに利用してもらうことを想定している。

木造で瀬戸内海への眺望を確保するためには耐力壁の関係でSE構法が最適であると判断し、採用に至っている。角度の振れた平面形状、複数の屋根の取り合いなど、細かな検討を経て架構が組み上げられた。

エントランスを入って正面に並ぶ3本の柱は180mm角で30mmの面取りを施している。大黒柱のような太さを備え、面取りをすることで安全性を確保しながら上部の梁との取り合いは120mm角の柱と同等の納まりとしている。構造、意匠、ディテールを満足させたこの柱の使い方は、SE構法による中大規模木造における大径材利用の好例であるだけでなく、木造の大空間に大黒柱のような象徴性を与えている点でも注目に値する。

# 木造の21世紀を考える 49

①

建築家
## 室伏次郎

## 内なる自然を追求する旅路

**室伏次郎さんの建築は、初期のRCの都市型住居からガラスを多用した開放的な建築へと変化している。しかし外部環境との関係性の構築という視点においては一貫していたのではないか。その志向の核についてうかがった。**

聞き手・文：橋本純、久留由樹子

①「北嶺町の家」北側外観見上げ。コンクリートの壁面にガラスの箱状の空間が取り付く。（撮影：新建築社写真部）

②「北嶺町の家」50年の住み方変遷。（提供：室伏次郎）

### 戦後民主主義第1世代として育つ

**室伏さんは1940年、東京のどちらでお生まれですか。**

東京都杉並区です。幼いときに亡くなった長男と次女を合わせて5人兄弟です。父は静岡県の生まれで、生涯にわたって石油関係の事業に携わっていました。
戦争が激しくなると静岡県の清水に疎開しましたが、最初の自宅の記憶は清水の家です。平屋で表口から入ると洋館の応接があって、そこに父の書斎がある。その奥に和風の部屋がある、昭和初期の典型的な家でした。
戦争がさらに激しくなり沼津に疎開しました。沼津の家は、切妻の大きな屋根の洋館と平屋の和館を曳家でつなげていて、洋館には板張りの床のダンスホールがありました。沼津はのどかで、よく海辺で遊んでいました。

**小学校はどちらですか。**

沼津市立第三小学校です。僕は戦後民主主義教育の第1期生なんです。入学すると「世の中は変わった。これからみなさんは、人に迷惑をかけない限り、なにを言ってもなにをしてもよい。そういう時代になったのですよ」と言われました。民主主義の時代になったことを、そう伝えられたことを覚えています。
5年生が終わる春休みに東京へ戻り、築地明石町に住み始めました。転入した明石小学校は関東大震災の復興小学校でしたから、校舎は3階建てのコンクリート造で屋上があった。田舎から出てきた少年にしてみれば、すごいところに来たなという感じでした。

**中学、高校はどちらでしたか。**

成城学園中学校です。父は慶応に入れたかったようなのですが……（苦笑）。成城学園は当時からリベラルで知られた学校でした。バスケットボール部に入ったんですが、父が事業の景気次第で住まいを変える引越し魔で、市川へ引っ越したため、通学に2時間かかるようになった。毎日疲れ果てて家に帰るものだから、たちまち成績は落ち、バスケをやめさせられ、勉強に専念することになりました。高校受験をして、今度は青山学院高等部に入りました。高校時代はバスケに熱中していましたね。

**建築を勉強しようと思ったきっかけは何だったのでしょう。**

井上靖の『河口』という小説に、建築家が未来都市について講演する場面が出てきます。モデルは菊竹清訓さんだと思いますが、建築家の仕事とは工学ばかりではなく優れて文学的なのだと思ったことがきっかけでした。
大学は夜間大学の早稲田大学の第2理工学部に入りました。第1理工学部の受験に失敗したためでした。早稲田を目指したのは吉阪隆正先生がいたからです。当時『蛍雪時代』という受験雑誌があり、そこで吉阪さんがル・コルビュジエという近代建築の巨匠の弟子だと知りました。しかし当時の吉阪さんは探検の時代で、ほとんど日本にはいませんでしたが。モダニズム批判が起きていた時代でしたが、教育はもっぱら機能主義でしたね。

**卒業論文と卒業設計についてお聞かせ下さい。**

卒業設計と卒業論文の指導教官は武基雄先生でした。僕は不真面目学生だったから武先生に卒論も卒計も1回も見せずに勝手に出してしまった（笑）。しかも昼間は遊んでいたので4年になってもまだ未提出の設計課題がふたつも残っていた。なので、それらの課題と卒業設計が同時進行になってしまった。
卒業設計は、当時話題の設計競技だった「国立京都国際会館」を設計しました。烏口でインキングが原則なのに、間に合わなくてロットリングにフリーハンドで描いたので問題になりましたが、今井兼次先生の援護があって辛うじて卒業できました。

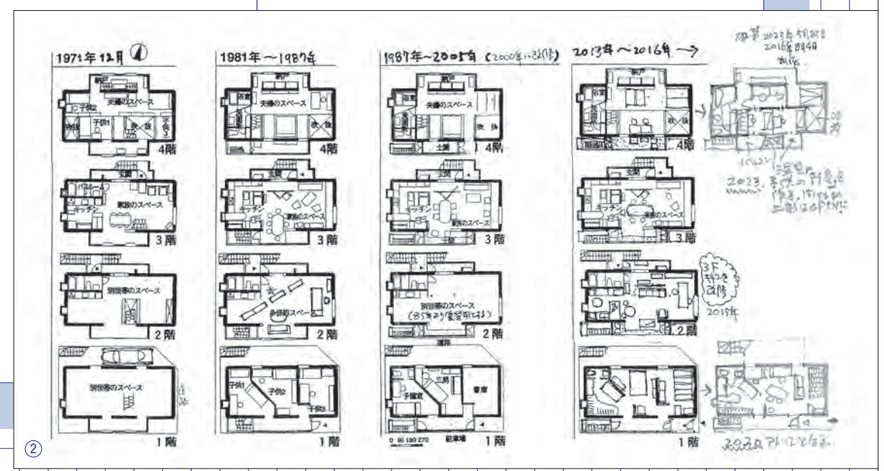
### 坂倉準三に師事する

**大学院に進学せずに坂倉準三建築研究所に入所しますが、当時の坂倉事務所はどのような雰囲気でしたか。**

オーストリアの元公使館で、坂倉さんが設計した真っ赤なキャノピーがついていました。階段の踊り場には坂倉さんがル・コルビュジエのアトリエにいたときに描いたパースが飾ってあり、反対側には「ゲルニカ」のレプリカが掛かっていて、とにかくかっこいい。ここで働けるのだと嬉しかったですね。

**「神奈川県立近代美術館」の新館を担当されましたね。**

新館の設計は、入所2年目の僕たち同期所員と3年目の所員による所内コンペで案を選ぶことになりました。僕はガラス張りでほとんど壁のない案を出したんですが、坂倉さんからは「こんな壁の少ない展示室でいったいどこに作品を飾るつもりですか」と言われました。だけど僕は、本館の展示室を回って半戸外の彫刻室を経たあとに、また箱に中に入るなんて考えられなかった。外や池が見える展示空間こそあの場所にふさわしいと思うと反論したところ、「君の言うことはわかった」といわれ、僕の案に決まった。嬉しかったですね。結局、坂倉事務所には7年勤めました。




②

**坂倉準三という建築家はどのような建築家でしたか。もっとも影響を受けた教えとはなんでしょうか。**

坂倉さんは1937年のパリ万博の際に「モダニズムのインターナショナルスタイルによって、国や地域に関わらず、機械的なるもので世界をある種統一するありようは非常に問題である。建築は生きた人間のために、喜び、愛すること、怒り、それらすべてを込めた存在で、その場所に唯一のものなのだから、世界中同じシステムではつくれないはずだ」という趣旨の論文を書いています。その精神を死ぬまで実践した人ですね。
「神奈川県立近代美術館」新館の現場のときに、坂倉さんは本館のベランダに佇んで「僕は日本的なるものを目指してものを構想したことはないのです。その建物が建つ場所にもっともふさわしいあり方を発見することが建築家の仕事ですよ」とおっしゃった。本館のテラスは日本の風土に即したモダニズム建築の傑作と評されますが、坂倉さんは日本的なものをつくろうという発想ではなかったのです。僕が坂倉さんと個人的に建築の深いところに触れる話をしたのはそれ1回だけですが、非常に大きな学びとなりました。

## アルテック始動

**1969年に坂倉さんが亡くなります。当時、室伏さんは、戸尾任宏さん、阿部勤さんとともに、タイ政府からの依頼で、現地の農業工業高等学校などの設計監理に携わっておられました。帰国後、戸尾任宏さん、阿部勤さんと3人でアーキヴィジョンを設立されますが、3人で始めようと思った理由をお聞かせ下さい。**

タイのプロジェクトでは4年間という短期間で全国25ヶ所の学校をつくりました。世界銀行のタイ政府への借款事業だったため、間に合わなければ建築家の責任が厳しく問われ、大変なペナルティを課されることが契約書でかわされていました。戸尾さん、清田育男さん、阿部さん、吉田由伸さん、僕の5人で担当し、全物件の作業を全員で共有することで、現地にはひとりで行き、誰にも相談することなく即決即断です。とても厳しい仕事でした。
そういう経験を共にした戸尾さんと阿部さんと僕で事務所をつくったのは、ある意味、坂倉さん亡き後の自然な流れだと思っています。

**組織形態はどのようなイメージをもって始められたのでしょうか。また最初の作品についてお聞かせください。**

3人の独立した建築家の集合というよりも、組織体というイメージでした。最初の大きな仕事は戸尾さんの関係で依頼された「奈良県立民俗博物館」でした。三者三様に手応えを感じた仕事だったと思いますが、戸尾さんと僕では10歳も違い、社会経験にも差があるうえに、戸尾さんが依頼を受けた仕事を3人で手がけ、しかもフィーは平等というのは、戸尾さんに申し訳ないと思うようになった。そこで僕と阿部さんはアーキヴィジョンから独立することにしたのです。

アルテック建築研究所としてふたりで始めたのは、同じ空間にいればスタッフを共有できるし、友人関係もより豊かになると考えたからです。今度は基本は個人ですから、建築の設計に関しての相談はお互いにほとんどしません。
やがて阿部さんのプロジェクトで目黒区に「五本木ハウス」という集合住宅ができると、その一室を借りて事務所をつくりました。阿部さんと僕の共同設計は、このアトリエ空間だけです。

**1984年に室伏さんはスタジオアルテックをつくって独立されますね。**

「五本木ハウス」から200mほど離れた僕が設計したマンションに、僕の事務所を移しました。当時は僕らとスタッフで14人もいて手狭になっていたのです。そこで組織としては株式会社アルテックには阿部さん、株式会社スタジオアルテックには僕がいて、アルテック建築研究所という組織はそれぞれが受けた設計実務を請け負う組織としました。

## 北嶺町の家の50年

**自邸である「北嶺町の家」は、4層分の梁型柱型のないRCのボックスを設定し、そのボックスに穴を開け、階段やテラスをその外側に取り付けています。そうすることで、閉じた箱とそれを穿つ開口の関係が明瞭になる。この着想はどこからきているのでしょうか。**

この家は1970年、僕が30歳のときに、広島の叔父が東京に越してくることを聞いて、一緒に建てることにしました。76㎡という小さな土地ですが、容積率がまだない時代だから、4層建てられた。高さ制限は今と同じ10mです。当時、工務店からは最低でも坪単価20万円といわれましたが、僕も叔父も13万円が限界でした。13万円しかお金がないのに、設えを工夫したところであっという間に陳腐化することは目に見えていた。だから精緻な建築家らしい設えからいっさい解放されてつくるしかない。そこで考えたのは「決めない」ということでした。
決めたことは、安心できる壁とそこに空いた穴からどのような光を入れるか、のみです。部屋をつくるのではなく、光と壁とプロポーションによってここにしかない場所をつくる。これが4層の箱の考え方です。私たちが3〜4階に、叔父家族が1〜2階に住みました。

**今に至るまで、どんな使い方をされてきましたか。**

建ててから10年ほどして叔父が田舎に引っ越すことになり、僕が買い取って4層をわが家の5人で使うことになりました。長男が高校に入ったときで、1階を3人の息子の部屋として、ドアはついてないけれども、身を隠す場所が生まれるようにエリアを区切った。それまでは4階に夫婦と子ども3人の寄宿舎状態でした。その後、2階は賃貸にして若い人に住んでもらいました。いろいろな人たちが住んでくれました。長男と次男が家を出たとき、そのスペースを書庫にして僕の部屋にしました。初めて僕の居場所ができた（笑）。三男は、子どもが幼稚園に上がるタイミングで、自分が通った幼稚園に通わせたいからと双子を連れて戻ってきた。そこで今度は僕らが下階に移った。40数年経って、高齢者が下階に、若者が上階に住むという元の姿に戻りました。
コロナになって、事務所をこの家の1階に移しました。いずれ夫婦どちらかが亡くなってひとりになったときに想定していた2階ひと部屋での生活を、ふたりですることになりました。この4×9mのひと部屋で食う寝るところをすべて賄っています。家としての機能ではなく場所として設計したので、どのような変化が起きても対応できたわけです。

**初期の住宅に比べると、後年は開放的な空間構成を取られるように変化していますが、室伏さんのなかではどんな変化が起きていたのでしょうか。**

「個の意識を育てるのは壁の空間だ」と考えて設計してきましたが、その壁に穴を開けるという操作によってつくり出せる関係性だけでは解決できないこともあります。場を設計するという思いは変わりませんが、1：地下、2：囲われた地上、3：浮遊する空間、4：天上の覆われた空間、5：空と交歓する場所、この5つの場所を持つことが都市の住まいでは必要であると考えるようになりました。

## 自然との距離を設計する

**「大塚山荘」「もえぎ野の家」「牛久保の家」は、形態が単純さを増しかつ自然ととても近い距離の設計だと感じますが、室伏さんはどのようにお考えでしたか。**

80年半ばに「御殿場のガラス小屋」を建てました。農業用温室を使った2階建てで、既製品によるプリコラージュです。テニス仲間の合宿場なのですが、男女夫婦も関係なく、それぞれが一個人として自然と相対することを実感する場として考えました。自然と自分という関係を認識できる場所をつくりたいという思いは、そこから始まっています。
続いて「ダイキン・オード・シェル夢科」のプロジェクトが始まりました。今までの保養所は、景勝地にホテルのようなものを建てて、そこを拠点に遊びに出かけていくイメージでしたが、この計画では自然とともにありその場を堪能できるように15の建物を原初の自然のままのような庭園内に点在させました。

**室伏さんは、住宅の設計とはどのようなものだとお考えでしょうか。**

住宅は基本的にある家族のためのもので、その家族とは血縁関係があり、腹が立っても最後には不条理でも許せる関係だとすると、個人の居場所は、ほかの家族からは見えないけれど音は聞こえて気配はわかる、そういう設えがよいと思います。
親子でも互いの顔を見たくもないということは当然起きますから、顔を合わせずに自分の居場所までいける動線をつくっておかなくてはいけません。「北嶺町の家」でも、子ども室に直接外から出入りできるようにしましたし、外階段、内階段と複数の動線をつくりました。

**木造建築について室伏さんは、どのようにお考えでしょうか。**

木造建築で意識することはふたつあって、ひとつは線材が純粋に見えるようにしたいということです。柱が整然と一列の構面に並ぶあり方は、美しいと思う反面、木造でも柱をもっと自由に立てられないかという思いもあり、そういう思いで設計したのが「鎌倉の杜」です。林のなかの斜面地に、柱をランダムに立て、そこに舞台を設えるようにつくりました。
もうひとつ木造で意識するのは、大工さんが培った伝統的で一般的な方法で建てられるようなものでありたいということです。現在、熊本県人吉市にある焼酎メーカーの酒蔵を建て直すプロジェクトを進めていますが、製造棟やギャラリー棟、事務棟などそれぞれスケールの違う空間も、120mm角の柱と120mm角の合わせ梁を基本として、組み立て方によって大きなスパンも小さいスパンも可能にしています。伝統的な木造の技法をそのまま継承しています。

## 建築の未来について

**戦後75年が過ぎ、21世紀に入って20年以上経ち、世界においても日本においても、戦後民主主義の影は薄れ、社会構造に変化が見られます。2020年以降、コロナ禍、ロシアによるウクライナ侵略の影響で世界中が疲弊しています。そうした社会変化は建築にどのように影響しているとお考えですか。**

コロナを機会にZOOMが浸透し、場所を問わないコミュニケーションが移住や2拠点生活を可能にして、都市構造も変わりつつあります。よい流れだと思いますが、そこで僕が思うのは、いよいよ自然と強く関わる生活の場、構築された外気の空間を持たなくてはならないということです。人間がモダニズムにより失った最大のものは、生物的なサバイバル能力だと思います。コロナはそんな人間を嘲笑うかのようでした。
建築家の富永譲さんはかつて「都市の喧騒もまた自然である」とおしゃいましたが、外という言葉で代表される幅広い自然とともにある建築を真剣に考えなくてはいけない。
そう強く思う根底には、タイで仕事をした4年間があります。タイの人たちは素朴で質素な半戸外で生活していましたが、そこにはえも言われぬ居心地のよさがありました。そうした生活を通して、人間が失った力を取り戻せたらと考えています。

③「御殿場のガラス小屋」。ガラスの温室を利用している。（撮影：新建築社写真部）
④「ダイキンオー・ド・シエル夢科」のセンターハウス。（撮影：新建築社写真部）
⑤「鎌倉の杜」を西側から見上げる。不規則に並ぶ柱の奥に、舞台のように2階が設えられる。（撮影：新建築社写真部）

**室伏次郎**（むろふし・じろう）
1940年、東京生まれ。1963年、早稲田大学理工学部建築学科卒業。1963年、坂倉準三建築研究所入所。1971年、坂倉準三建築研究所より独立、建築研究所アーキヴィジョン設立。1975年、アルテック建築研究所設立。1984年〜スタジオ・アルテック設立。1994年、神奈川大学工学部建築学科教授。2010年〜神奈川大学工学部建築学科名誉教授。

# 三原久井の家

設計：株式会社バウムスタイルアーキテクト一級建築士事務所
施工：株式会社バウムスタイルアーキテクト
写真：笹の倉舎／笹倉洋平
文：橋本純

SE構法の実例

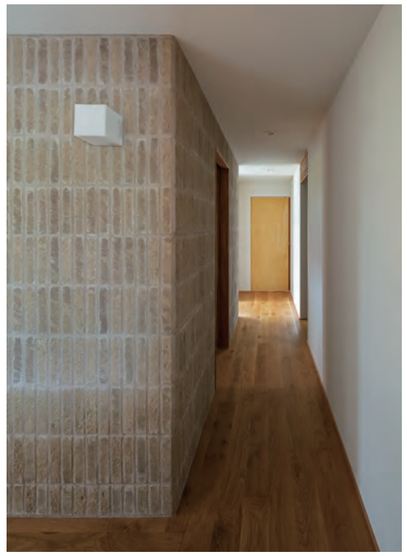
ダイニングからリビング方向を見る。天井高は手前のダイニングが2,200mm、180mm床レベルを下げたリビングで2,380mm。天井は珪藻土塗り仕上げ。

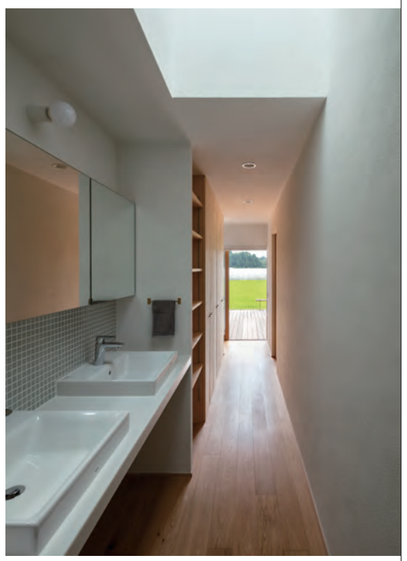
左頁：リビングからダイニングを見る。リビングの床は鉄平石貼り。

上：ダイニングからウッドデッキ方向を望む。ウッドデッキの外周部には造付けのベンチを設けている。

下左：玄関からプライベートゾーンへ至る廊下を見る。

下右：洗面コーナーからウッドデッキ方向を見通す。暗くならないようにトップライトを設けている。





# 平屋こそSE構法で建てる

**震災を契機に首都圏から山間地へ転居し就農した家族のための、**
**ゆったりとした開放的な平屋での暮らしに安心を与えたのはSE構法の架構だった。**

「三原久井の家」は、広島県三原市に2020年に竣工した戸建て住宅である。建主のKさん夫妻、設計・施工を請け負った株式会社バウムスタイルアーキテクト代表取締役の藤原昌彦さんにお話をうかがった。

## 横浜から三原へ

夫は、三原市の出身である。神奈川県横浜市に住み、携帯電話のインフラに関する仕事に就いていたが、かねてから地元へ戻って就農したいという思いを持っていた。その思いを家族に伝えると、当初、妻と3人の子どもたちは、生活の激変を懸念して反対した。その家族に意識の変化をもたらしたきっかけは、2011年3月の東日本大震災とその後の原発事故だった。首都圏で暮らし続けることへの漠然とした不安感が膨らみ、ちょうど学期末だったこともあり、夫を横浜に残し、妻と3人の子どもたちは4月末まで、三原で避難生活をおくることにした。三原でのひとときの暮らしは、震災後の不安を感じることもなく、ゆったりとした時空間を与えてくれた。
横浜では、一軒家を借りて住んでいたが、自分たちの家を建てたいという夢を実現するには、横浜は土地代が高い割には広々とした空間が得られないことはわかっていた。しかし、一時的な帰省と居を構えて住み始めることは話が別である。転居に賛同したものの、子どもの学校や習い事のことなどを考えると、妻にはすぐに新しい生活のイメージを持つことができなかった。都会を離れて就農し、新しい生活を始めるためには、生活に関わる大きなシフトチェンジが必要だった。

## 就農をかなえる

敷地は、三原市とはいっても中心部から北に13〜4kmほどの、山あいに田畑が広がる場所である。夫の実家からは約300m（3町歩）と近い距離にある。敷地面積は1,000㎡弱で、田畑の一角を入手した。農地を取得するにあたっては、実家が近く、地主の信頼を得やすかったことは大きい。一方で地域の現実としては、専業であれ兼業であれ農家の高齢化はのっぴきならない状況で、耕作を諦めて土地を手放したい人が増大していると聞く。しかも、耕作を放棄して土地が荒れれば周囲の農家に迷惑をかけることになるため、お金を払ってでも土地の手入れを怠ることはできないという共同体の厳しい現実が重なる。結果としてKさん夫妻の移住は、地域にとって喜ばれるものとなった。
夫は現在、実家の農園で働いている。両親は進歩的な農家で、1974年にこの地でハーブ農園を始め、現在は弟がその事業を継いでいる。関西圏を中心に全国各地のレストランとの取引がある。コロナ禍で飲食店への販売が激減した際には、かつて通信系技術者であった夫がその経験を生かし、ネット販売を通じて一般消費者への販路を開拓し、経営拡大に貢献した。地域で培われた生産のノウハウと、情報ネットワークを活用した販売方式が連携して、第1次産業の再活性化が実践されている。こうした役割を担っていくことも、都市部からの就農の一形態なのだ。

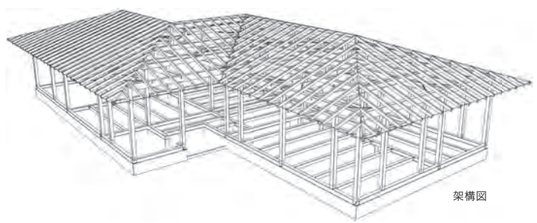
## SE構法で平屋を建てる

夫妻と藤原さんの出会いは、妻が愛読している『モダンリビング』誌に掲載されていた藤原さんの仕事に好感を持ったことがきっかけだった。藤原さんのオフィスが隣県の岡山でさほど遠くはないと感じたこともあり、連絡をとって、当時住んでいた横浜まで来てもらい、話をするなかで、設計を依頼することを決めた。
北と東の2面接道で、道路側にはL字形に高さ1,500mmの擁壁を立

上：ウッドデッキからリビング方向を見る。外壁は米杉材を張って仕上げている。デッキの右奥は腰壁を設け、斜路とし、車椅子のアプローチを可能にしている。

左：東側アプローチを見る。右の擁壁を回り込むように玄関へアクセスする。

右頁：南西より俯瞰する。アプローチに設けた擁壁は正面の谷筋からの風除けでもある。



架構図

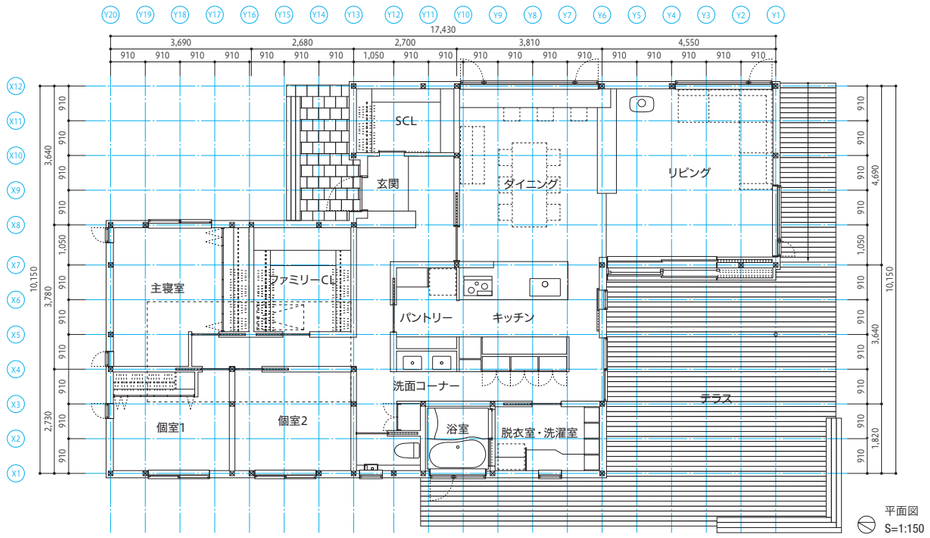
て、プライベートゾーンへの視線を制御しつつ、植栽された中庭も設えている。L字形の擁壁の外側にもう1枚壁を立てて、アプローチはその壁に沿ってL字形の壁の端部を回り込み、中庭の手前で折り返して玄関に至る。玄関先にはベンチを設え、ちょっとした来客対応、いわゆる井戸端会議の空間としている。

玄関を入ると、右手が個室や水回りを配したプライベートゾーンで、正面に進むとLDKがある。リビングダイニングは、8,360mm×4,690mmの無柱空間である。リビングは床のレベルを180mm下げて鉄平石を貼っている。リビングの西側には、レベル差をなくして広々としたウッドデッキを設けた。

リビングから連続するこのウッドデッキは、両親や夫の兄弟家族が集まったときに、リビングの拡張空間として機能する。デッキの片隅には、夫が手づくりしたピザ窯が設けられ、バーベキューに限らず、さまざまな料理でもてなしがなされる場となる。リビングの南側ではデッキを斜路状にし、車椅子生活をおくる父がウッドデッキ経由でリビングへアクセスできるように配慮されている。デッキの先には農地が広がっているため、日射遮蔽を考慮して、軒の出を2,730mmと大きく取っている。

リビングダイニングは、西側のデッキに開かれるだけでなく、南、東面にも大きな開口を設けた開放的な空間である。周囲の農地や、近接する集落の風景などへの眺めが大切にされた。窓には脇に通風のための開口部を設け、中央部は眺望のために嵌め殺しにしている。

平屋ではあるが、震災を契機にこの地への転居を決めたこと、眺望を楽しむための開口部の大きな壁面と、スパンを大きく取った開放的なLDKでの生活を無理なく楽しめる家とするために、SE構法による架構は欠かすことのできないものであった。




平面図
S=1:150

**建物名称：三原久井の家**
所在地：広島県三原市
主要用途：住宅

**設計・監理**
建築：株式会社バウムスタイルアーキテクト
一級建築士事務所
担当者名：藤原昌彦／田中雅子
構造：株式会社エヌ・シー・エヌ

**施工**
施工：株式会社バウムスタイルアーキテクト

**敷地条件**
用途地域：都市計画区域外
防火指定：なし
道路幅員：東側5.0m、北側5.0m
駐車台数：4〜5台

**構造・構法**
主体構造・構法：SE構法（木造軸組構法）
基礎：ベタ基礎

**規模**
階数：1階
軒高：3,055mm
最高高さ：4,301mm
敷地面積：948.00㎡
建築面積：136.61㎡（建蔽率：14.41%）
延床面積：128.33㎡（容積率：13.53%）
1階：128.33㎡

**工程**
設計期間：2018年4月〜2019年10月
施工期間：2019年4月〜2020年6月

**設備システム**

**空調**
空調方式：薪ストーブ、ルームエアコン、
温水床暖房
熱源：薪、電力、LPガス

**衛生**
給水：井戸水
給湯：ガス給湯器（LPガス）
排水：合併処理浄化槽

**電気**
受電方式：低圧受電

## より良い住まいの道しるべ 24

文：長井美暁

案内人

**安多茂一（安多化粧合板株式会社 代表取締役社長）**

**家具や照明、ファブリック、植栽など、生活に求められるコンテンツを提案できると、顧客の信頼度が増します。この連載ではその道のプロフェッショナルがそれぞれの視点で案内します。**

# 「木の風合いが感じられる厚さ0.6㎜の突板」

天然木化粧合板に使われる突板（つきいた）の厚さがどれくらいか、ご存知ですか？　国内メーカーの製品は0.2㎜前後が一般的で、なかには0.13㎜という薄さもあります。一方、当社は世界基準の0.6㎜の突板を使っています（内装制限がある場合を除く）。世界基準では樹種によって0.9㎜もあり、これ以上厚いと割れやすくなります。

0.13㎜まで薄くできる技術は単純にすごいと思いますが、0.6㎜に比べると当然ながら質感がよくありません。その違いは最終的に空間に表れます。0.6㎜あれば木の風合いが感じられるので、当社は枚数を稼ぐことよりも質感を優先し、0.6㎜の突板で化粧合板をつくっています。無垢信者の方も当社の突板を実際にご覧になると、それまで持っていたイメージが一変するようなので、この厚さによる質感の違いは大きいでしょう。最近の化粧塩ビフィルムはクオリティがすごく上がっていますから、私などは0.13㎜の突板を使うくらいならフィルムのほうがいいと思ったりもします。

### 物語を大切にしながらデザイン

当社のお客様は設計や施工にあたる方、あるいは建主で、オーダー時は樹種を指定されることより空間のイメージを伝えられることが多い。そのため対話を重ねて製品をつくり上げます。お客様のイメージに合わせて選んだ突板をプレゼンテーションする際は、実物をスキャニングして展開図やパースなどの図面に落とし込み、そこにナラティブ（物語）と実物サンプルを添えて提出しています。

木にはそれぞれ物語があります。たとえばウォールナットには、この木の下でプロポーズをすると幸せになれるという言い伝えがあり、ウエディング関係の施設にぴったりです。そういった物語や選んだ背景も私たちは大切にしています。

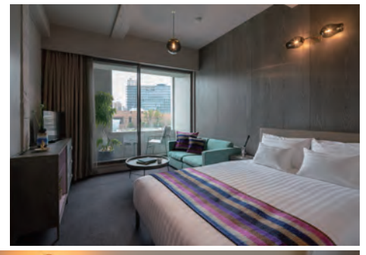
ただカタログではそこまで伝えられないので、今はつくるのを止めました。カタログがあると品番でオーダーされてしまうことも、つくるのを止めた理由です。カタログでご覧に入れられる写真は実際の突板のごく一部。それに天然木は個体によって色柄がまったく違います。私たちは「木で風景をつくる」ことを標榜していますが、部分的な写真や品番から突板を選ぶだけでは「木で風景をつくる」ことはできないと思うのです。

建築家の永山祐子さんが改修設計を手がけた「玉川髙島屋S・C本館グランパティオ」。受付スペースやエスカレーター周りの壁面に、北海道大雪山系で育ったナラの突板化粧合板が使われている。白いラインは「白太」を活かしたもの。白太は木の中心に近い赤身に比べると、柔らかいため虫に食われやすく、製材の種類によっては切り落としてしまうことも多い。安多化粧合板が頼んでいる製材所では、原木の伐採後すぐに燻蒸やスライスをして、白太入りの突板の鮮度を保っているという。（写真：阿野太一）

デザイナーの中川泰章さん（muura）が内装設計を手がけた大阪・松屋町の菓子店「杏」。さまざまな樹種の突板にエキセントリックな表情を与えた仕上げとしている。（写真：スターリン エルメンドルフ）

**安多茂一**（やすた・しげかず）
安多化粧合板株式会社 代表取締役社長
大阪生まれ。家業の安多化粧合板株式会社を継ぎ、1992年より現職。国内外の建築家やインテリアデザイナーから高い評価を受ける突板のスペシャリスト。社会情勢を絡めた独特の視点によるデザイン分析、ロジカルなトレンドフォーカスには定評がある。
https://veneer.co.jp

兵庫県西宮市の家族葬ホール「ふわり」。インテリアデザイナーの大工真司さん（Ninth）が改修設計を手がけた。大雪山のナラの突板化粧合板をホールの壁面に採用。クリーム色の木肌にくっきり入った白太が、天に昇るイメージを具象化する。天井まで続くグリーンウォールは祭壇の代わり。（写真：MIKIKO）



空間デザイナーの間宮吉彦さんが率いるインフィクスが企画からデザイン、運営まで手がける大阪・北浜のホテル「THE BOLY OSAKA」の客室。「truffle beech」や「irony cherry」など客室ごとに使われている突板の樹種が異なり、室内の雰囲気も変わる。（写真：下村康典）

### パーツに施工図を添えて納品

左の写真で紹介している家族葬ホール「ふわり」では、設計者の大工真司さんが節のある木を使うことを望んでいました。しかし節はネガティブな印象を与える場合もあります。それを避けるため、天に昇るイメージで木の白いラインを入れました。クライアントにプレゼンしたら、気になっていた節も、故人が歩んできた人生の思い出の数々のように見えると、印象が180度変わったようでした。最終的には施設名も「ふわり」に決まり、故人が天にふわりと昇っていき、悲しみではなく喜びをもたらしてくれるという空間イメージにまで発展しました。

このように当社では、お客様の最初のイメージをただ具象化するのではなく、対話からお互いの知恵で出来上がっていくプロジェクトが多々あります。今回はそうしたなかから商業施設での採用事例を写真でご覧いただきます。天然木化粧合板は商業施設でもよく使われていて、張り方によって見た目が無限に変わる面白さをおわかりいただけるでしょう。

当社製品の納品形態はパーツごとに分かれ、組み合わせるとこうなるという施工図もお渡ししています。普通の天然木化粧合板はサブロクやシハチといった規格サイズでつくりますが、当社は木目の柄合わせを優先して、あえて規格とは関係ない大きさでカットしたりするので、施工図は必須です。

施工は施工者さんにお任せしますが、当社は事前の打合せにより、製品がどこにどう使われるかをわかってつくります。下地を不燃にしなければならないとか、曲げベニヤでつくらなければならないなど、その現場に合わせられるのでご安心ください。

Report

# 強い家は地震防災対策の基本である

## 耐震住宅100%実行委員会 記念シンポジウムを開催

文:酒井新

地震予知研究を30年間続ける長尾年恭氏の基調講演。

**2023年9月19日、「一般社団法人 耐震住宅100%実行委員会」主催による記念シンポジウムが東京・本郷の東京大学伊藤国際学術センター「伊藤謝恩ホール」で開催された。基調講演に立ったのは地球物理学者の長尾年恭氏。「関東大震災から100年・首都圏に存在する新たな火種」と題された約1時間の講演では、地震予知の最先端で活躍されている同氏から最新の知見や分析が披露され、参加者は熱心に耳を傾けた。基調講演に続いて耐震住宅100%実行委員会の3つのワーキンググループ(以下WG)から活動報告も行われた。また同日は、同実行委員会の第6期定時社員総会も開催された。6期の事業報告と7期の活動方針に関する4つの議案についての質疑と採決が行われ、いずれも承認された。**

### 南海トラフの巨大地震や首都直下型地震は絶対に来る

基調講演を行った長尾年恭氏は世界最大の地球物理学研究組織である国際測地学地球物理学連合の「地震・火山に関する電磁現象国際WG」委員長を務めるほか、地震予知の分野で活動を続けている。冒頭、長尾氏は今年2月6日にトルコで発生した大地震について触れた後、日本における巨大地震の発生の可能性について語った。

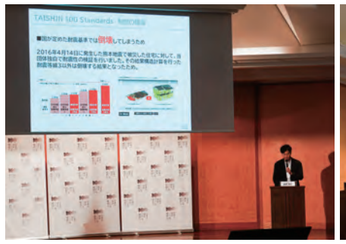
「南海トラフの巨大地震や首都直下型地震は、長い間『来る、来る』といわれながら来ていない。そのためもう来ないのではないかという人もいる。しかしいずれの地震も必ず来る。『地震が来ますか?』という質問は、『人は死ぬんですか?』と質問しているのと同じで、人は必ず死ぬ。それと同じように地震も必ず起きる。地球が生きている限りプレートの移動があり、それが引き金となる地震の発生は避けられない。しかも、次に起きる南海トラフ地震は非常に大きい可能性がある。静岡県の御前崎には4段の隆起地形があるが、まったく同じ4段の隆起が奄美諸島の喜界島にある。つまり、同時に隆起している可能性がある。隆起は過去7000年の間で4回起こっていると見られ、前回は1800年前であり、100年に1度程度の南海地震・東海地震の間に、桁違いに規模が大きいスーパーサイクル地震が1800年から2000年間隔くらいで起きているということになる。これがもうすぐ発生する可能性がある」。さらに長尾氏は、首都直下型地震に触れてこう解説した。

「首都直下型地震というのは単独のひとつの地震を意味するものではなく、現在は19箇所で起きる可能性があり、どれもM7クラスの規模が想定される。そのなかでも、都心南部で起きたときに最大の被害が発生するとみられている。19箇所以外にわからないのは、そもそも東京は住宅密集地であり、活断層を見つけることができない。活断層というのは第一義的には空中写真で非常に直線的な構造を探す。たとえば中央構造線はそれで明確にわかる。しかし東京では見えない。もうひとつの探索方法は人工地震を起こして調べるものだが、首都圏ではそれもできない。しかし、どこであるにしても首都直下型地震も確実に来る。元禄関東地震が1703年、安政江戸地震が1855年で、これが首都直下型地震の最後になっている。すでに170年以上の空白がある。その後の1923年の大正関東地震は相模トラフのプレート境界で起きたものでM8クラス。この地震からもすでに100年が経過している」。

### 日本は自然災害リスクが非常に高い国住む家が強いことが絶対に必要

必ず来る大地震に対する最大の備えは住む家が強いことであり「これができていなければ話にならない」と長尾氏は明言した。

「日本は自然災害のリスクが圧倒的に高い国だ。日本の国土面積は世界の陸地面積の0.25%にすぎないが災害被害額は世界の17%を占める。富士山も必ず噴火する。これを否定する火山学者はひとりもいない。ただし10年後か20年後か、それはわからない。南海トラフ地震、首都直下型地震ではライフラインの切断などにより膨大な帰宅困難者と被災者が出る。IT化された巨大都市が世界で初めて被災するケースになる可能性がある。このときもっとも大切なことは家が壊れないこと。なぜ避難所に2カ月も3カ月もいるのか。なぜ車中で寝なければならないのか。家が強いということは地震防災対策の基本中の基本だ」と語った。



定時社員総会とワーキンググループの活動報告も同日に行われた。

### 南関東ガス田に由来する自然火災への備えも必要

東京直下型地震には建物や構造物、ライフラインへの被害に加えて、実は新たな災害の懸念も生まれてきている。ただしそれについては国の被害想定にも含まれていない。非常に懸念すべき状態だと長尾氏は指摘する。

「関東大震災では火災による被害拡大が注目されていて、これは火災旋風によるものと見られてきたが、そうではなく別の要因であったと推定できる。それは南関東の地下に溜まっているガス田の存在である。メタンガスが大量に存在するのだ。私はこれを『首都圏の新たな火薬庫』と呼んでいる。安政地震でも地面の割れ目から炎が吹き出したという証言はたくさん残っている。関東大震災の出火場所は安政地震の出火場所ときわめてよく似ている。さらに関東大震災では鉄が溶けているが、鉄が溶けたのはメタンガスが吹き出してこれが燃えたからだと考えられる。今は被害想定も行われていないが、地震に伴う火災発生の想定と対策の実施がなければ、大地震時に東京は火災地獄になってしまう」。

さらに「20世紀は例外的におとなしい時代だった。日本が戦後高度経済成長の道を進んだ時代は日本に巨大地震・巨大噴火はなく、経済発展にとっても好都合だった。しかし21世紀は普通の世紀に戻っている。住まいにも都市にも厳重な備えが求められている。耐震住宅100%の実行に向けて取り組みを進めることは、住宅建設に携わるひとりひとりにとって大きな使命となっている」とまとめ、基調講演を終えた。

---

長尾年恭
1955年生まれ。東京大学大学院理学系研究科修了・理学博士。静岡県立大学および東海大学客員教授。「地震・火山に関する電磁現象国際WG」委員長。一般社団法人「日本地震予知学会」会長ならびに認定NPO法人「富士山測候所を活用する会」理事。専門は固体地球物理学。地震予知研究を通じた減災や富士山噴火予知をライフワークとする。

Notice

# SE構法技術研修会

SE構法技術研修会をE-Learning(オンライン)にて実施しています。
現場施工に照準を絞り、実際の現場の流れに沿って事例を交えて解説いたします。
工務ご担当の方をはじめ、設計、営業のご担当者様もぜひともご参加下さい。

**■ 開催日程**

第190回
2024年1月1日(月)〜1月14日(日)
※お申込み期間
2023年12月1日(金)〜12月15日(金)

第191回
2024年2月1日(木)〜2月14日(水)
※お申込み期間
2024年1月5日(金)〜1月15日(月)

上記期間中におよそ5時間の講義をオンラインで受けていただきます。
修了試験もオンラインで行います。

参加費:20,000円(消費税込)

参加希望の方は下記のURLよりお申込みください。
https://business-online.ncn-se.co.jp/workshop/

定員は各回35人です。お早目のお申し込みをお勧めします。
ご不明な点は、エヌ・シー・エヌの営業担当者までお問い合わせ下さい。

Information for Constructors
NetworkSE

ネットワークSE 190号
2023年11月発行 [隔月発行]

発行者 田鎖郁男
マネージメント 安藤幸子(エヌ・シー・エヌ)
編集長 橋本純(ハシモトオフィス)
編集 長井美暁/久留由樹子
デザイン 橋本祐治(Bushitsu)
図面トレース 長谷川智大
印刷 山田写真製版所

表紙写真:笹の倉舎/笹倉洋平

株式会社エヌ・シー・エヌ
〒100-0014
東京都千代田区永田町2-13-5 赤坂エイトワンビル7F
TEL. 03-6897-6311

© NCN 2023 Printed in Japan 禁無断転写複写